

2021 年度報告書の刊行に寄せて

法政大学学生センター長 齋藤 勝

前年度に引き続き、2021 年度も新型コロナウイルス感染症の拡大による制限を強く受ける年になりました。

振り返ってみると、東京都では4月12日から24日までまん延防止等重点措置、4月25日から6月20日まで緊急事態宣言、6月21日から7月11日までまん延防止等重点措置、7月12日から9月30日まで緊急事態宣言、1月21日から3月21日までまん延防止等重点措置と発令が続きました。とくに春学期は二ヶ月以上が緊急事態宣言下にありました。

しかし正直なところ、前年度ほどの切迫感はなかったように思われます。その要因としては、東京オリンピックの開催やワクチン接種の開始を挙げることができますが、個人的には、人々が状況に慣れ、感染症の実態、ウイルスの性質、感染の仕組み、感染対策といったことについての理解を深めたことが大きかったのではないかと思います。

そのようななか、正課の授業では、前年度に比べて対面実施が増えたものの、残念ながら、オンラインに慣れてしまったために、特段の理由もなく登校せず、オンラインで授業に参加するという学生が少なくないという話を耳にすることがしばしばありました。そのたびに、大学に来て色々な人と交わるという、学生にとっては「普通の日常を取り戻す」ことの大切さと難しさを実感することになりました。このような状況のなか、学生センターに関わる教職員の間では、せめて課外活動を通じて「普通の日常を取り戻す」きっかけが作ればという気持ちが強くなっていきました。そのため、課外教養プログラムにおいても、一年を通じて対面による企画を多く実施していくことになりました。

たとえば、「見え方が 360° 変わる!? 法大生がイチから学ぶ自治体のシゴト」は、昨年度の田中総長に続き廣瀬総長に対面でご講義いただき、総長と学生との間で直接、言葉のやりとりを行っていただく形での実施となりました。総長という自分からは遠く思える存在でも、直接、表情を目にして言葉を交わすことでより身近に感じ、一つ一つの言葉の意味や話の文脈、言外に込められた思いまでより明確に感得することができ、対面だからこそ得られる知見の広がりを経験することができたのではないかと思います。

また、学外に足を運ぶ企画についても、恒例の「歌舞伎鑑賞教室」「能楽鑑賞教室」に加え、「初めての美術館の歩き方」「ライオンキング鑑賞教室」「明日の通学が楽しくなる!? 市ヶ谷キャンパス周辺地理・歴史ツアー」という新しい企画が実施されました。とくに「キャンパス周辺地理・歴史ツアー」は、キャンパスに通う機会が減ってしまった今だからこそ、自らの通う大学の存在を頭と体で感じるができる有意義な企画であったと言えます。

企画に当たっては、まず学生スタッフが企画書を作成してくこととなりますが、企画書を読んでいると、この間の生活を通じて学生の間で新たな関心が呼び起こされてきていることに気づきます。「方言から学ぶ私たちの言語表現」「学校生活が充実? より良い睡眠への第一歩」「ヘッドネーションって何だろう? ~Be yourself 自分らしく生きる~」等は、

これまで見られなかった企画です。逼塞した生活の中で、学生たちが何に関心を向けてきたかがよく分かります。

一方、オンラインによるコミュニケーションの広がりや、新たな可能性ももたらしました。「おうちにいながら触れ合える！ あなたの知らない離島の世界」は、行き来が容易ではない式根島の観光協会の方とオンラインで直接やりとりのできるものでした。この企画を通じて式根島の魅力を知り、式根島を直接訪れた学生も多くいたそうです。また当日の様子は、伊豆・小笠原諸島のローカル紙である『東京七島新聞』でも紹介されました。今後も本学と式根島の交流が続くことが期待されます。

2020年度の報告書の巻頭言は、「次の一年は、前の一年の経験を活かして、より良い活動ができることを願ってやみません。」という言葉で締めくくりましたが、2021年度の実施企画を振り返ってみると、前年度の「願い」は十分かなえられたのではないかと思います。それもこれも、担当の職員や学生スタッフの頑張りとともに、多くの方々のお力添えがあったからにほかなりません。あらためて、皆さまに、心より御礼申し上げます。

2022年度は、より自由かつ活発に多種多様な企画が実施されることを願っています。